

## 「新しき村」と『或る女』

——『或る女』成立前夜の問題——

宗 像 和 重

有島武郎と志賀直哉の編集になる『現代三十三人集』が新潮社から刊行されたのは、大正十一年二月のことであった。武者小路実篤の依頼により、四年目を迎える「新しき村」の活動資金に供するためである。その趣旨は、志賀の「序」に詳しい。

今、新しき村では水路を開き、水田を作り、尚余裕があれば同じ水を利用して水力電力を起さうとして居る。そして自分達はその資金の一部として此集の印税を寄附しようとして居る。さう云ふ目的で此集は出版された。

その出版に先立って、有島と志賀の連名で出された作品収録依頼の手紙には、この同じ趣旨とともに、「村に好意ある方々の御助力に依り積極的に金を集めたいと思ひますがその一つの方法として『現代三十何人集』と云ふ本を作り」たい、という言葉が見える。実現したのが『現代三十三人集』だから、作品の寄付を依頼された作家のほとんどが、応諾したのであらう。その顔ぶれを

一覽するだけでも、「新しき村」に寄せる幅広い同時代作家の関心がかうかえて興味深いのだが、むしろ今は、志賀直哉とともに有島武郎がこの編集に名を連ねていることのほうに、私はより多くの注意をひかれる。

というのは、しかし、武者小路が「新しき村」を起こすにあたって、「自分は彼を信用して居る。彼は屹度それを仕とげると思つてゐる」という「自分は彼を信用してゐる」(『新しき村』大正七年七月)を書いた志賀と、「私はあなたの企てが如何に綿密に思慮され実行されても失敗に終わると思ふものです」という「武者小路兄へ」(『中央公論』同年同月)を書いた有島とが、その評価において対照的であつたことを思い出すからではない。あるいはまた、そうした評価のちがいにみてもかわらず、有島がここに肩を並べていることに、遠ざかつていた武者小路との友情回復の証しを見たいからでもない(もとより、そのような意味はあつたにしても)。そうではなくて、このような形で武者小路に対する援助の音頭をとることに、有島はある感慨を禁じえなかつたにちが

いない、と思うからなのだ。あのような失敗の予言はしても、実はだれにもまして自分自身が、「新しき村」の企てに励まされ、刺激を受けてきたのであったことを、感謝とともに振りかえらずにはいられなかったろう、と思うからなのだ。私の言いかたはまわりくどいが、問題にしたいのは『或る女』との関連にはかならない。武者小路が「新しき村」の運動を起こした大正七年といえ、有島が書きあぐんでいた『或る女』の執筆に着手する、まさにその年なのである。これまで、後年の農場解放との関連においてのみ考えられることの多かった、有島武郎における「新しき村」の意味を、おそらくは『現代三十三人集』をまえにした彼がそうしたように、私もまた振りかえって考えてみたいと思う。

## 二

すでに引いたように、「新しき村」の運動がようやくその緒についた大正七年七月<sup>(2)</sup>、「武者小路兄へ」という私信の形で所感を発表した有島は、その企てが失敗に終わるだろうことを予言したのであった。それが、新事業の建設に熱中する武者小路には、よほど不服であつたらしい。「武郎さんに何か言はれて確信が爪のあか程でも動く武郎さんが本当に思ひ込んでゐるならばそれは少し自惚れすぎてゐる気がする」(『六号雑感』、『白樺』大正七年八月)というような、よく知られた反発を招くことにもなるのだが、もとより有島はそのようなことを思いこんでいたわけではない。彼はただ、「何んと云つてもまだ十分死物狂ひに暴威を振ふ」資本主義社会からの、「ドハボールの移民達が外界から被つたや

うな」圧迫のまえに、そうした企ての失敗が避けられないことを、熟知していたまでである。と同時に、失敗が不可避であるところにこそ、「新しい時代の礎」としての企ての意味を認めようとしていたのである。これもよく知られた一節だが、やはり引用しておきたいと思う。

要するに失敗にせよ、成功にせよ、あなたの方の企ては成功です。それが来るべき新しい時代の礎になる事に於ては同じです。日本に始めて行はれやうとするこの企てが、目的に外づれた成功をするよりも、何処までも趣意に徹底して失敗せんことを祈ります。

しかし、武者小路がこれにどれほどの不服と反発を覚えたにしても、それによって、彼が「新しき村」の失敗を予想できなかった楽天家であり、有島ほどの洞察力に欠けていたのだとする類の見解は、大津山国夫氏が強く異議を唱えられているように<sup>(3)</sup>、やはり早計であろう。武者小路自身、後年の回想のなかで、「武郎さんは僕の新しき村がうまくゆかない事を信じないわけにはゆかない、うまくゆかないでも立派な仕事だと、あまり早く言わけしてくれただけで、少し之は僕風にとりすぎているかも知れないが、弁護してくれた。それは僕の気持を察知しての上のつもりで大へんな厚意でかいてくれたのだと思うが、僕はつぶれると思つて新しき村をつくつたのではないから、その厚意は受けとれなかつた」と語っていたのであつたことを、見のがすべきではない。そうした、大津山氏の言葉を借りれば、「いったん理想に身をゆだねたら、後悔しても後悔したと公言してはならぬし、まして失敗をみ

ずから認めるようなことは許されない」不退転の決意とともにあった武者小路にとって、先の引用に続く有島の言葉が、いかにももどかしく思われたであろうことは、想像に難くないのである。

未来を御約束するのは滑稽かも知れませんが、私も或る機会の到来と共に、あなたの企てられた所を何等かの形に於て企てようと思つてゐます。而して存分に失敗しようと思つてゐます。

この「武者小路兄へ」の最後の一節は、ふつう、それから四年後の大正一年に有島農場を解放することになる彼の、遠い予告であると理解されている。たしかに、武者小路とは形こそ異なるものの、生活改造の志は、農場を視察しながら「自分の生活を全然変へなくてはならない」と日記に残した十年ほどまえ（明治四一年七月二八日付）から、すでに有島のものであった。「余は、余の生活を全然変へなければならぬ。近年、特に強くそれを感じつゞけてゐる」とは、同じく二年まえ（大正五年三月二六日付）の日記に見る言葉でもある。とすれば、武者小路の果敢な企てを眼前にして、「あなたの企てられた所を何等かの形に於て企てようと思つてゐます」と語る有島が、これまで果たせなかった実生活の改造を遠くに見ていることは、疑うことができない。そういうものとして、この「武者小路兄へ」が位置づけられてきたことにも、異存があるわけではないのである。

とはいえ、この「武者小路兄へ」のなかで、有島が常にこたわりつつづけていたのが、一人の芸術家としての武者小路の姿勢であ

ったことを、無視することもできないのではあるまいか。「ことに芸術家なるあなたがこの企てに走られた事」に対して、「私も芸術にたづさはる一人としてあなたに対して敬意を表します」と語っていたのである。武者小路はといえば、「僕の不服は僕という人間に対して君は一言も信頼を示さず、僕のする仕事をただ文士の仕事としてのみ認めて、一般の場合として、文士の仕事として尊敬してくれたことです。僕は文士として今度の事を始めたわけではありません」と反論していたのであったから、そこに有島の誤解といえは誤解があったとはいえよう。が、その反論を受けてなお、「武者君はその公生涯の始めから今日まで一人の芸術家として立つてゐた。君はそれを恥ぢては居られないと思ふ」と言い、「僕には武者君と芸術家とを切り離し、武者君と生活の改革者とを切り離す事は出来ない」と言うとき、ここではすでに武者小路がではなく、有島自身が語られている、と思わざるをえない。同じく、あの「武者小路兄へ」の発表からまもない七月一日、原久米太郎にあてた書簡のなかで彼が強調していたこともまた、なによりもまず芸術家としての自己を全うしようとする覚悟にはかならなかつたのである。

一生かゝつてすべき仕事だと思つてゐる。そんなにあわてゝはゐない。唯是れからは僕の書いた事に対して僕が責任を持つべき時が来るのだ、実動的に勇氣の乏しい僕に取つては是れは可なり難儀な事に思へる。然し是れが出来なければ僕の文字は畢竟空文になり終るのだ。そんな事に終らせてはならぬ。

そしてこの当時、一人の芸術家としての有島がかかえていた最も大きな課題といえは、明治四四年一月から大正二年三月まで、『白樺』に断続連載していた「或る女のグリンプス」を完成させること以外にはなかった。「今年は一つ白樺で『或る女』の続篇を完成してしまはうと思つてゐる」(大正七年一月四日付、足助素一宛)とか、「今年は白樺に精力を集めて『或る女のグリンプス』を本年中に仕上げてしまひたいと思つてゐますが、甘く行けば仕合せです」(同年一月二日付、吹田順助宛)といった年頭の書簡からも、ようやくその機が熟しつゝあることがうかがえよう。事実、この年前半の有島は、「生れ出る悩み」(『大阪毎日新聞』同年三月一六日―四月二九日)と、「石にひしがれた雑草」(『太陽』同年四月)という対照的な二つの作品を並行して書き進めることで、『或る女』を用意していくことになるのである。

にもかかわらず、そうして『或る女』に向かいつつあった彼が、この年の六月にはまだ、「そろ／＼仕事に取／＼つてゐます。然しまだ何んだかモーメンタリがつきません」(同年六月一五日付、八木沢善次宛)と語っていたのであったことも、注意されなければならぬと思う。ここには、自分の仕事に向かうとしながら、もう一步を踏み出しきれない有島の姿がある。――きつかけをつかめずに、なお躊躇している有島の姿がある、と言つて過言ではない。とすれば、それから一か月後の七月一日、先ほどの原久米太郎宛書簡のなかで、「唯是れからは僕の書いた事に対して僕が責任を持つべき時が来るのだ」という決意とともに、文学者として大きく踏み出そうとしている、いわば「モーメンタ

リ」のついた有島への変貌は、やはり「新しき村」からの刺激なしには考えられないのではあるまいか。ちなみに、あの「武者小路兄へ」が書かれたのは、彼自身が文末に記した日付によれば、「まだ何んだかモーメンタリがつきません」と八木沢善次にあてて書いた五日後の、六月二〇日のことにはかならない。

すなわち、『或る女』をまねにして、なお十分に踏み出せずにいた有島が、「武者小路兄へ」を一つのはずみ、跳躍板(モーメンタリ)にすること、その完成に向かって踏み切ることになった経緯を、ここにうかがうことができるように思うのである。それによつて、武者小路との不和を招いたことを悔みながら、しかし「氏の心持ちを考へるとえらいと思ひます。近來一寸得られなかつた好刺激を私は氏によつて受けてゐます」(同年九月一八日付、吹田順助宛)とは、彼自身認めるところでもあった。そして事実、この年の暮れから、「僕は今『或る女』に没頭してゐる」(同年十二月一日付、原久米太郎宛)というような、精神的な『或る女』の執筆が開始されることになるのである。

### 三

同じ事情は、実は『現代三十三人集』のもう一人の編者である志賀直哉についても、指摘できるように思う。有島が『或る女』をかかえていたように、この当時志賀がかかえていたのは、もとより『暗夜行路』にはかならない。この作品が『或る女』に劣らない長く困難な形成前史を持つことは、すでに広く知られているところだが、そうした形成前史のなかで、この「新しき村」との

出会いは、やはり一つの大きな転機だったのではあるまいか。というの、『志賀直哉全集』第六卷「暗夜行路草稿」（昭和四八年八月、岩波書店刊）に収められている、「草稿26（資料）」に注目したいと思うからである。末尾に「七月三日」という執筆月日が記されているだけで、その年が明らかでないこの草稿は、紅野敏郎氏の「後記」によれば、「長篇『暗夜行路』に取り組むに際しての心構え、構想メモともいふべきものであって、「あくまでも中止せず、一時的の失意に打ち負けることなく、この長篇を書きあげる決意十一項目が明示されている」ものである。今、その最初の教項目を引用してみる。

○自分は何んでもかでも此長篇を書き上げる事。

（欄外）生ひ立ち

○一時的の失意に打負かされる事大禁物、

○或る個所の失敗は先でおぎなへる。

○失敗の個所は他日単行本にする場合直せもする。

○何より悪いのは中止する事である。

そして最後に、「究局の価値を疑うな。一時的の疑惑は起つても」という決意とともに、この草稿は結ばれている。これを「大正七年か八年かのどちらかであろう」とする紅野氏の推定を受けて、町田栄氏はその綿密な「暗夜行路」成立史論のなかで、同じく「大正七年のその記録としたいのである」と推定されたのであった。氏によれば、志賀直哉がいわゆる私小説「時任謙作」から、長編「暗夜行路」への「移転」を試みるのが、「大正七年夏のころ」にはかならない。氏はこの時期を、「現『暗夜行路』が

具体的に胎動し、実際に試みられる」時期としているのだが、たしかにこの年秋の「白樺」には、「志賀は十月号から続物の創作を発表する筈だ」（大正七年九月）、「志賀の長篇が今月から載る筈だ」たが、志賀の都合で来月からになつた」（同年一〇月）という連載の予告が、「編輯室にて」欄に掲げられることになる。これらは、結局実現しなかったものの、志賀における創作活動の胎動をうかがわせるであろう。とすれば、「自分は何んでもかでも此長篇を書き上げる事」を自分自身に命じる「草稿26」を、それらの創作活動の胎動を促したものと見る町田氏の推定は、十分な根拠を持つと考へてもいいのではないか。

そして、もしそうだとすれば、町田氏は触れていないのだが、「大正七年七月三日」というこの日付けは、有島の場合と同じように、武者小路による「新しき村」との何らかの関連を、予想させないであろうか。冒頭で触れたように、志賀は七月の『新しき村』創刊号に「自分は彼を信用してゐる」を発表して、「自分は彼を信用して居る。彼は屹度それを仕とげると思つてゐる」と書いたのであった。しかも、それが実際に執筆されたのは、これも文末の日付けによれば、六月二五日のことにはかならない（有島の「武者小路兄へ」が六月二〇日の執筆であったから、この二人は立場を異にしたが、ほとんど同時に「新しき村」と相對していることになる）。彼はその後、「時に多少の消長はあるに違ひない。然しどんな時にも其時として最善な方法を彼はとるに違ひない」とも続けているのだが、そうした武者小路からの刺激を、自己の創作意欲に振りむけようとしたところに生まれたの

が、おそらくは「究局の価値を疑うな。一時的の疑惑は起つても」と結ばれた、七月三日付の「草稿26」の決意だったのである。

つまりここでも、六月二五日の「自分は彼を信用してゐる」から、七月三日の「草稿26」、そして「白樺」九月号の長編掲載予告に至る一連の流れのなかで、志賀直哉が「新しき村」の企てに促されるように、自らの創作に向かって踏み出すことになった経緯を見る事ができるように思うのだ。というよりも、むしろ、町田氏の言われる「大正七年夏のころ」に『暗夜行路』が胎動しはじめた根本の原因こそ、この「新しき村」とそこからの刺激だったのではなかったか。周知のように、やがてこの作品の冒頭には、「武者小路実篤兄に捧ぐ」という献辞が記されることになるのであって、なによりもそれが、単に長い友情の記念であるのみならず、この作品と「新しき村」との結びつきを、問わず語りしているように思われる。

いずれにしても、九月号の「編輯室にて」が言うように、志賀直哉ははじめ『暗夜行路』となるはずの長編を、「白樺」に連載しようとしていたのであった。そして有島武郎もまた、「今年には白樺に精力を集めて」という一月の書簡が示すように、当初は『或る女』を『白樺』に連載するつもりでいたのである。もし偶然が許せば、『或る女』と『暗夜行路』という二つの大きな作品が、武者小路の「新しき村」の企てに促される形で、彼らの故郷である『白樺』に、——それも大正七年の後半というほとんど同じ時期に、並行して連載されることになったかもしれない、とい

う想像もあながち無理ではあるまい。もとより、「新しき村」の企てがなくとも、二つの作品は完成しえたに違いないが、少なくとも今のような形で、今のような時期に完成されることになったかどうかは、疑わしいだろうと思う。そこに、これまでほとんど言及されることのなかった、「新しき村」のもう一つの波紋を見たいと思うのである。

ただ、志賀直哉の場合には、翌一〇月号の「編輯室にて」が言うように、その続物の長編はついに書かれることがなかった。そして彼自身も、同じころに書かれた「断片」のなかで、「どうしてかう心が沈むのだらう。張りもはずみもない」といった、奇妙な沈滞感を訴えることになる。実際に「謙作の追憶」が書かれた『新潮』大正九年一月、さらに「暗夜行路（前篇）」の連載が開始されるまでには、『改造』大正一〇年一月、なお二・三年の歳月を必要とするのであって、そのことの意味を考えなければならぬのだが、今はそこまでの用意がない。改めて考えたいと思うが、そうした志賀とは対照的に、有島がこの年の暮れから精神的な『或る女』の執筆を開始することは、すでに見てきたところであった。そして、「或る女のグリンプス」の改稿になる前編が翌年三月に、続いて後編が六月に、それぞれ著作集第八輯・第九輯として、叢文閣から刊行されることになるのである。

#### 四

しかし、有島にとって「新しき村」からの刺激は、ただ『或る女』の完成を促すはずみ（モーメント）にはとどまらないので

あって、おそらくは、その内容にまで影響を与える性質のものであった。武者小路の企ての失敗を予言しながらも、「何処までも趣意に徹底して失敗せんことを祈ります」と語る言葉のなかに、すでに翌年の『或る女』後編において、あれほどの情熱をもって破滅としか見えないような葉子の生きかたを描くことになる有島がいる、<sup>11)</sup> といつて過言ではない。というよりも、おそらく事情は逆なのであって、葉子の破滅的な生きかたを決定させたものこそ、あえて無謀な企てのなかに飛びこもうとする、武者小路の果敢な冒険そのものだったのではなかったか。『或る女』の解説としてよく引かれる広告文もまた、そのことを物語っていたように思われる。

畏れる事なく醜にも邪にもぶつかつて見よう。その底には何があるか。若しその底に何もなかつたら人生の可能は否定されなければならない。私は無力ながら敢てこの冒険を企てた。

ここにはやはり、武者小路に「あなたの企てられた所を何等かの形に於て企てようと思つてゐます。而して存分に失敗しようと思つてゐます」と書いた彼が、直接それに答えるものとして『或る女』を位置づけようとする姿勢が、うかがえるであろう。葉子の破滅への道が、すでに「或る女のグリンプス」の段階から暗示されていることは、蒲生芳郎氏をはじめ多くの指摘があるところであつて、これを「新しき村」との関連においてのみ捉えられないことはいうまでもない。が、そのようにして破滅への見通しを持ちながら、十分に描ききれずにいた有島に跳躍を促したものと

そ、繰りかえせば武者小路の果敢な冒険であつた。その意味で、有島にとつて『或る女』は、とりわけその後編は、いわば文字による「新しき村」の企てであつた、といつていいかもしれない。「何んと云つてもまだ死物狂ひに暴威を振ふ」明治の社会において、否定されるかもしれない「人生の可能」を賭けて、葉子を底の底まで追いつめてみるからこそ、「実動的な勇氣に乏しい」と自身認める有島が、武者小路の実践に触発されることでともかくもなした「冒険」にはかならなかったのである。そして彼は、どのようにしてその冒険に飛びこむことになったのか。

新橋を渡る時に発車を報ずる第二鈴が鳴つた。田鶴子は平気で夫れを聞いたが車夫は宙を飛んだ。而して車がつる屋の角を曲つて、毎時でも人と馬との群るあの共同井戸の辺を駆け抜ける時、霧とまでは云へない九月の朝の煙つた空気で包まれた停車場の階段の上に、たつた一人佇んで居る青年の姿が見えて、停車場の戸は閉りかゝつて居た。

今や改稿への確かな見通しをもつて、旧作「或る女のグリンプス」の冒頭部分（『白樺』明治四四年一月）を読みかえしている有島の姿を、私は想像できるように思う。あるいは彼は、「田鶴子」という名前を消して、「葉子」と書き入れてみたかもしれない。おそらくこの女主人公の改名には、多くの指摘があるように、愛読していたホイットマン『草の葉』からの影響があるのだろう。「水があなたのために輝くのを拒み、而して木の葉があなたのためにひらめくのを拒まない間は、私の言葉もあなたのために輝きひらめくことを拒みはしない」（傍点は引用者）とは、彼

が『或る女』のために用意したエピソードの一節でもあった。<sup>(13)</sup> いずれにしても、この女主人公早月葉子の破滅的な生きかたに賭けてみようとする点で、少なくとも今の有島には迷いが無い。むしろ、彼が改めて考えなければならなかったのは、「停車場の階段の上に、たつた一人佇んで」女主人公を待ち、その最初から彼女に従う青年、古藤の位置づけにあったのではなかったか。脱稿後の書簡のなかで、「古藤と云ふのは私です」(大正八年九月五日付、黒沢良平宛)と語っていた有島にとって、古藤が荷うべき役割を決定することは、なによりも彼自身が葉子をどう見るかを明らかにするという意味で、改稿に際しての最も大きな関心事であったように思う。

そしておそらく、そうした古藤の立場が決定されるのは、第五章における横浜の宿の場面にはかなるまい。いうまでもなく、木村の待つアメリカ行きの切符を受けとるために、古藤と連れだつて横浜に赴いた葉子は、休息のために借りた宿の一室で、彼を誘惑してみたい衝動にかりたてられる。「不図した出来心と、古藤を味方にして置く必要から」という「或る女のグリンプス」の説明を、有島はやがて改稿にあたつて、「その晩葉子はこの少年のやうな心を持つて肉の熟した古藤に罪を犯させて見たくつて堪らなくなつた。一夜の中に木村とは顔も合はせる事の出来ない人間にして見たくつて堪らなくなつた。(中略)幾枚も皮を被つた古藤の心のどん底に隠れてゐる欲念を葉子の蟲感力で掘り起して見たくつて堪らなくなつた」と大幅に加筆することになるのであつて、そこにハバロック・エリス『性の心理学』などが援用されて

いることは、広く知られているところである。

が、こういう設問はたしかに滑稽に響くのだが、もし葉子が古藤を誘惑することに成功していたら、——古藤が葉子の誘惑に屈していたら、『或る女』は旧作「或る女のグリンプス」とは、まったくちがった展開を見せることになったはずである。そうなれば、葉子のアメリカ行きはなかったかもしれないし、彼女のアメリカ行きがなければ、倉地との出会いもまたなかったであろう。そのとき『或る女』は、葉子と倉地との関係としてではなく、葉子をめぐる古藤と木村との対立葛藤の關係として、書かれざるをえなかったように思う。先ほどの蒲生氏によれば、古藤こそ「最も深刻に葉子と噛み合い、葛藤し、この作品の小説的骨格、あるいはその構造性を支える役割を担う相手役」(傍点は原文)ということになるが、まさにそのような存在としての古藤が、出現することになったように思うのである。言いかえれば、葉子の破滅を外側から見つめて批判するのではなく、当事者として葉子の破滅のドラマのなかに進んで身を投じる古藤が、立ちあらわれることになったように思うのである。

そしてそうした古藤のありかたをこそ、武者小路の果敢な冒險に倣つて、自らもまた葉子の破滅のなかに飛びこもうとしていた有島は、一度は探っていたのではなかったか。六月二〇日に「武者小路兄へ」を書いて『或る女』に踏みだそうとしていた彼が、なによりもまず、この年四月号の『太陽』に発表した作品「石にひしがれた雑草」の再検討をせまられることになったのも、理由のないことではない。というのもこの作品は、Aという男のアメ



リカ留学中に、婚約者M子が別の男と恋に陥る。留学から帰ったAはM子との結婚後、彼女と相手の男とに陰湿な復讐を加えていく。その過程を、Aから相手の男にあてた書簡の形で書いたものであって、いわば、葉子をめぐる木村と古藤の關係そのものだからである。『或る女』の改稿に先立って、有島が再びこの作品に向かうことになった理由を、そこに見ることができるのはあるまいか。すなわち、『石にひしがれた雑草』を書き直す」という記事がはじめて日記にあらわれるのが、あの「武者小路兄へ」を書いた直後の六月二五日のことにはかならない。「新しき村」の直接の反応である「武者小路兄へ」に続く最初の仕事で、この作品の改稿だったのである。

## 五

おそらくは本多秋五氏以来、<sup>(14)</sup>「石にひしがれた雑草」を『或る女』の手の込んだヴァリエーション<sup>(15)</sup>とする見方は、ほぼ衆目の一致するところであろう。それを更に一歩進めて、「この作品はいろんな意味で、有島が『或る女』という船を建造するため作ってみた模型と考えられる」とし、「実にこの作品は、『或る女』前篇から後篇への屈折を解明し、有島の謎、作家としての有島の本質を明らかにするためのキーポイントになる作品である」(傍点<sup>(16)</sup>は原文)と位置づけたのは、小坂晋氏であった。たしかにその通りなのだが、こうして迎ってくる時、問題は四月の『太陽』に発表された初出ではなく、実はこの改稿のうちにあった、と思わざるをえない。有島はこの作品を、「生れ出る悩み」とともに

著作集第七輯として刊行するにあたって(九月、叢文閣刊)の広告文に、『宣言』を書いた時の心持をもう一度裏返して自分に迫らなければならぬ必要を感じた」と、発表当時を振りかえっていたのである。当初は「宣言」を意識して書かれた作品のなかに、葉子をめぐる木村と古藤の關係を再考する手がかりを見出したとき、有島は改めてこれを『或る女』の「模型」として改稿することになった。いわば、「石にひしがれた雑草」は、その改稿を通してはじめて、『葉子の誘惑に屈した古藤』の物語としての性格を、帯びることになったのである。

その意味で、Aのアメリカ留学中にM子と恋に陥る相手の男が、この改稿の最初から「加藤」という名前と呼ばれていることに、注目しないわけにはいかない。加藤と古藤という名前の類似は、偶然にすぎないであろうか。少くとも、『太陽』の四月号に掲載された時点での相手の男の名は、「D」だったのである。作品の冒頭近くでM子がAに投げ与える英語の暗号めいた手紙にならって、私もここに語呂合わせを弄すれば、初出の段階における「石にひしがれた雑草」の世界は、まさにM子をめぐるAとDとの三角關係の世界なのであって、それは文字通り嫉妬と妄想との愛の狂気(MAD)の世界以外のものではない。たとえばこの作を評した加能作次郎をして、「殆ど肉體的關係をのみ描写したと思はれるやうな作」であり、「M子がどういふ動機でDと姦通して居るのか、作者は単にM子は多姪な女であるかのやうに取扱つて居るばかりで、其の肉體的關係そのものが如何なる意味をもつか、人間生活にどんな力をもつかといふことには作者は目を向けて居

ない」と言わせるようなものが、たしかにそこにはあったのである。しかしながら、改稿後の「石にひしがれた雑草」は、そうではない。

誰れが運命に敵する事が出来よう。若し俺れ達の間の運命が不幸にして狂つたものだつたら、俺れ達は運命を尻眼にかけてやる為めにも互々に憐れみ合はなければならぬ。筆ぢやないか。……人間といふものは何故かう淋しく生きなければならぬのだ。この淋しさ……俺れはもうこの淋しさに独りであるに堪へない。

右の引用は、改稿後の結末近くのAの独白であつて、初出ではまったく欠けていた箇所だが、これが『或女』で私が読者に感銘して欲しいと思つたものは、現代に於ける女の運命の悲劇的な淋しさといふ事でした（大正八年一〇月八日付、浦上后三郎宛）と彼が説明する、『或る女』の主題に著しく類似していることに、注意したいと思う。少くともここで問題になっているのは、すでに三角関係や姦通の狂気の世界、加能作次郎のいわゆる「肉的關係」そのものではない。いわばそれは、人間を否応なく押しつぶそうとする運命と、それに打ちひしがれながらもあらがおうとする人間の自覚であつて、有島がこの少し後で、松井須磨子の鑑死に触れて書いた「雑信一束（第三信）」（『我等』大正八年二月）の言葉を使えば、これはまさに「運命と個性とのつかみ合ひ」による悲劇にはかならない。しかもそれが、ひとり「現代に於ける女の運命」のみならず、「俺れ達の間の運命」として、登場人物間の対立葛藤のうちに追求されていたのである。

おそらくはこの改稿こそ、「新しき村」の無謀ともいえる企てに促された有島が、葉子の破滅を自らもまた共にできるかどうかを賭けた、渾身の試みではなかつたか。なによりも「石にひしがれた雑草」——「葉子の誘惑に屈した古藤」を通して、葉子の破滅の劇のなかに古藤もまた、——ということとは「古藤と云ふのは私です」と語る有島自身もまた、飛びこめるかどうかを試されていたのではなかつたか。「君のなまぬるい神経に僕等三人の運命の結末が何う映るか。兎に角僕は魂の薬抜けになつたM子を君に与へる」とは、その徹底した復讐によって、ついにはM子を強度のヒステリーに陥らせたAから加藤への最後の言葉だが、だとすればここからはじまるM子と加藤の物語こそ、『或る女』の葉子と古藤に受けつがれるはずであつた。彼ら二人の破滅を賭けた、奇怪な道行きが幕を開くはずであつた。その意味では、『或る女』に向かうにあたって、彼が葉子と古藤の横浜行きの書き出しに固執したのも、偶然ではない。「これでは古藤との接触面における葉子は描けるにしても、彼女の全像は描き出しにくい」（傍点は引用者）とは、本多秋五氏の指摘されるところだが、まさしく「古藤との接触面」を主軸とするような、もう一つの『或る女』ともいふべき新しい作品が、たしかにそこにははじまりかけていたのである。

## 六

見てきたように、「新しき村」の刺激から「石にひしがれた雑草」の改稿を通して、有島は破滅と混乱をおそれない「運命と個

性とのつかみ合ひ」の可能性を、探ってきたのであった。「だから我等は恐れずに生きよう。我等の心は不安定の心だ。世界と我等の心は屢々やうやく建立しかけた安定の礎から沁り落ちる。世界と我等とは有らん限りの失態を演ずる。この醜い蹉跌は永く我等の生活を支配するだらう。それでも構はない、我等はその混乱の中に生きよう。我等は恐れるに及ばない」とは、「石にひしがれた雑草」のすぐ後に書かれた「運命と人」(『中外』大正七年一〇月)の一節だが、そうした彼の覚悟を最も端的に物語っているであろう。が、それにもかかわらず、七月三〇日の日記において、一か月余をかけた改稿作業の終了を語る彼の口ぶりは、不思議に重い。『石にひしがれた雑草』を書き終へる」と語った彼は、すぐに続けて、「執筆中、余り感興を覚えず」と言わなければならなかったのである。「仕事は割合に出来るが時にはあき／＼して仕舞ふ。一体こんな事をしてゐて何になるんだといふ様な氣になる」とは、同じ頃に(七月二八日付)足助素一にあてた書簡の一節でもあった。そしてこの時期、一方において「運命と人」を書き、「我等はその混乱の中に生きよう。我等は恐れるに及ばない」と語る彼は、また一方において、「大なる健全性へ」(『文章世界』同年八月)の道をも探らずにはいられないのである。

畢竟人生は常に遊戲に没頭するには余りに嚴肅だ。人類全体は自分が本質的に持つてゐるものゝ何んであるかを摸索し、把持し、実現し、向上させようとする動向を一刻も捨てないでゐる。この嚴肅な動向は、仮初めの皮肉や、突飛な思

ひ付きや、弱さから来る旋毛の曲げ方でぐらつくものでは決してない。人類を根柢的に動かし、永く人類の生命を培ふものは、その健全性を促進する力であらねばならぬ。芸術家はこの一大事を忘れてはならぬ。

あの「武者小路兄へ」において、彼が常に一人の芸術家としての姿勢を問題にしていたことを、思い出してもよいかもしれない。「運命と個性とのつかみ合ひ」に全身を投じようとしていた彼を、人生の「嚴肅な動向」への思いが、押しとどめるのである。そしてそれに見合うように、続いて書かれることになる『或る女』においては、葉子の誘惑に屈した古藤ではなく、常に葉子とはある距離をおいた存在として、葉子の破滅を外側から見つめる古藤が、描かれることになる。西垣勤氏によれば、古藤を「倫理的ボール」として「道徳的バランス」をとることによって始めて、有島は葉子の破滅の劇に向かうことができたのである。葉子対古藤の關係の重要さに触れながら、「有島はこの二人の劇的葛藤の契機を所どころに描きはしても、つまり、葉子・倉地・古藤の奇怪な三角關係の發生を予測させはしても、そういう劇的可能性を少しも追求していない」とは、山田昭夫氏の指摘されるところでもあったが、おそらくそこに、彼のかすかなたじろぎがあった、と言わざるをえないだろう。意を決して一步を踏みだしながら、まさにその瞬間において、わずかに身を引いている有島がいる、と言わざるをえないであろう。

いずれにしてもこれが、『新しき村』の刺激と鼓舞をうけて、有島武郎がたどりついた『或る女』の出发点であった。思いき

て「混乱」に飛びこもうとしながら、なお「大なる健全性」を求めようとする彼がかえこんだ矛盾は、やがて「心の迷路を辿り辿つて漸く築きあげたやうな人生観も、兎もすると自分の性格が崩して仕舞はうとする」(大正八年六月一七日付、足助素一宛)というやうな危機感となつて、『或る女』脱稿後の有島を苦しめることになるのだが、もとよりこうした結末部の苦しみは、彼にはまだ見えていない。「今は唯第八輯の執筆に専心するだけになつてゐます。(中略) 仕事があったい、まとまつた仕事があったい、唯そのみが願はれます」(大正七年十二月一日付、富沢みほ子宛)と語る彼は、今ようやく『或る女』の筆をとったところである。

注(1) 『志賀直哉全集第』十二巻「書簡一」(昭和四九年四月、岩波書店刊)に、有島武郎と連名で佐藤春夫にあてた、大正一〇年十一月一日付の書簡(二四四)が残されてゐる。

(2) 大正七年五月の『白樺』に発表した「新しい生活に入る道」において、はじめて「新しき村」の構想を明らかにした武者小路は、次いで七月に機関誌『新しき村』を創刊し、この運動を具体的に展開することになる。

(3) 大津山国夫「トルストイ体験と『新しき村』——「新しき村」と武者小路実篤(1)——」(静岡女子大学『国文研究』創刊号、昭和四三年六月)

(4) 武者小路実篤「武郎さんと僕」(北海道文学館編『有島武郎文学アルバム』所収、昭和四二年一〇月)

(5) 注(3)に同じ。

(6) 有島武郎「読者に」(『白樺』及び『新しき村』大正七年

九月)に引用された、武者小路から有島あての書簡。

注(6)の有島武郎「読者に」。

(7) この間の経緯については、内田満氏の「有島武郎の創作方法(下)——『石にひしがれた雑草』から『或る女』へ——」(『同志社国文学』第十一号、昭和五一年二月)に詳しい。

(9) 町田栄「『暗夜行路』の最前夜——その『前編』の成立——」(『文学』昭和四八年五月、五〇年三月、五月)

(10) この「断片」は、末尾に一〇月一日の日付けがあるが、実際に発表されたのは、翌大正八年十一月の『解放』である。

(11) 拙稿「『或る女』結末改稿の問題——「人生の可能」をめぐる——」(紅野敏郎編『有島武郎「或る女」を読む』所収、昭和五五年一〇月、青英舎刊)で触れたように、この広告文が自筆かどうかは疑問が残るが、いずれにしても有島の意に適ったものとして、ここでは扱う。

(12) 蒲生芳郎「『或る女』論——『或る女』のグリンプス」と『或る女』後編の関係——」(宮城学院女子大学基督教文化研究所『研究年報』九〇十号、昭和五二年三月)

(13) ホイットマン『草の葉』より、「名もない淫売婦に」の一節。ただしエビグラフは英文のまま。ここでは有島訳『ホキットマン詩集』による。

(14) 本多秋五「有島武郎論」(新潮文庫版『白樺』派の文学)所収、昭和三五年九月)

(15) 小坂晋「『石にひしがれた雑草』と『或る女』——主人公の精神構造と主題——」(桜楓社刊『有島武郎文学の心理的考察』所収、昭和五四年九月)

(16) ただし『太陽』の初出においても、その後半からは、加藤にかわっている。そこに有島の混乱があるのだが、私はむしろ、執筆中に古藤への連想から、加藤という名に引き

ずられる結果になった、と考へたい。それを意識しておこなったのが、改稿なのである。

(17) 加能作次郎「二三の作品について」『文章世界』大正七年五月

(18) 注(14)に同じ。

(19) 西垣勤「『或る女』再論——後篇について——」(有精堂刊『有島武郎論』所収、昭和四十六年六月)

(20) 山田昭夫「『或る女』」(右文書院刊『有島武郎、姿勢と軌跡』所収、昭和五一年四月)

〔付記〕本稿は、昭和五五年度日本近代文学会一〇月例会での口頭発表に、加筆したものです。成稿にあたって多くのご教示をいただいた岡本卓治先生、佐々木雅彦先生にお礼申し上げます。

## 新刊紹介

梶原正昭著

『平家物語』(鑑賞日本の古典11)

本書は『平家物語』の中から「祇園精舎」より「御往生」に至る、主要な章段二十二章を選び、その読解と鑑賞を行ったものであるが、本文の深い読みに基づいた著者の創見を随所にちりばめた鑑賞が、本書の最大の眼目であろう。これまでの『平家物語』研究や歴史研究なども活用しながら、読解

と鑑賞のポイントを具体的に、かつ懇切に提示し、『平家物語』の文学的魅力を縦横に説き明かしている。そうした読解・鑑賞を助けるために、絵画・写真・地図などを数多く収めているのも本書の特色であるが、これが著者の魅力的な語り口と相まって、本書を楽しみながら読めるものとしていえるといえよう。

本書のもう一つの特色は、『平家物語』の語りものとしての特質を明らかにするために、底本に国会図書館蔵の波多野流の墨譜本を用い、各章段に「平曲ノート」(鈴

木孝庸氏執筆)を付し、本文詞章と平曲の曲節との関係に照明をあてていることである。その他、巻頭には「解説」、巻末には「参考文献解題」「関係年表」「索引」などが付されているが、索引にも「合戦用語」「仏教用語」の項目を設けるなど、類書にみえない工夫がなされている。一般の方々のみならず、国文学研究者にも一読をすすめたい好著である。

(昭57・6 尚学図書 四六判 五四四頁 一八〇〇円)〔加美 宏〕